

# 短角牛の産直を試みて

木藤古 徳一郎

(岩手県九戸郡山形村)

Trying to Establish Direct Circulation of Japanese Shorthorn Beef from Farmer to Consumer

Tokuichirou KITOUGO

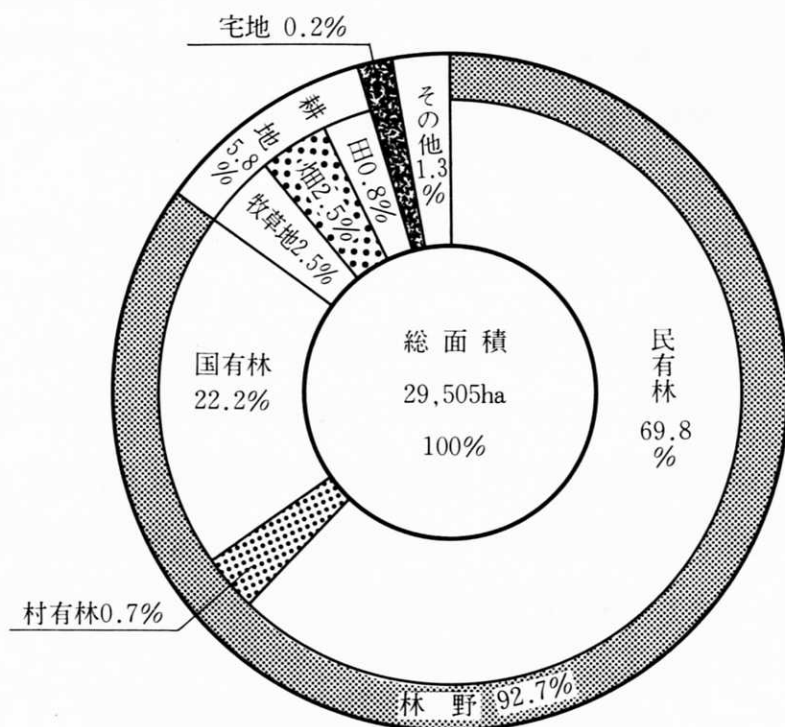
(Yamagata Village, Kunohe, Iwate Prefecture)

## 1 村の概況

山形村は北上山系の北端に位置し、村の総面積は2万9,000 haという広大な面積を有しており、そのうち93%が山林原野で占められている典型的な山村です。

土地条件、自然条件ともに非常に厳しい条件下にあり、農家戸数688戸、その中で日本短角牛の飼育農家は343戸、飼育総頭数が1,400頭となっている。村の産業はこれというものがなく、古くから日本短角牛を村の産業の基幹としてその振興に取り組んできた。

村の土地利用状況



(単位 ha)

| 林 野 27,347 |     |       | 耕地 1,701 |     |     | 宅 地 | そ の 他 |
|------------|-----|-------|----------|-----|-----|-----|-------|
| 民有林        | 村有林 | 国有林   | 田        | 畑   | 牧草地 |     |       |
| 20,589     | 203 | 6,555 | 237      | 731 | 733 | 69  | 388   |

## 2 子牛生産地から肉牛の生産地へ

山形村の短角牛飼育の歴史は古いが、かつては子牛の生産が主体で、所謂子牛の生産地であり、年1回、秋の子牛市場で子牛を販売するという経営で、子牛の市場価格によって生産者が常にゆさぶられ、不安定な経営がなされてきた。子牛で勝負ということがわざわいし、関係者、生産者共に産肉能力の高

い肉牛に改良しようという改良意欲等においても必ずしも充分でなかったといえる。

昭和52年農協が事業主体となって肉用牛生産団地育成事業の導入を行い、地域内における生産と肥育の一貫経営の確立を目ざして、肥育センターの設置が契機となり、山形村にも本格的に肥育部門の導入がなされた。

「子牛生産地から牛肉の生産地への一大転換を図ろう」をスローガンに村、農協、生産者が一体となり、関係機関の指導をいただきながら鋭意努力をしているところである。

### 3 大地を守る会との産直へのスタート

子牛生産地から肉牛の生産地への転換を合言葉に肥育部門の導入を図ったがいざ肉牛を販売する段になると予想外の問題点が山積していた。それは価格の面で我々が期待している線にいかず、肥育農家は常に経営が苦境に立たされたことであった。農協の肥育センターの経営も容易でなかった。これは、短角牛の絶対頭数が少ないこと、まき牛による季節分娩が主体のため通年出荷ができないこと、肉質特にサシが入ってこないこととか、いろんな理由づけがなされたが、いずれにしても既存の流通の中では意図するようにいかなかったことは事実で、全く途方に明け暮れる始末であった。

このことは、我が山形村のみならず短角牛を飼っている地域の共通した悩みであり、大きな問題点として事あるごとに議論のまとめであったが、これぞという解決策がないまま経過してきた。たまたま、日本短角牛研究会秋田会場で、岩手県畜試村田場長、当時県畜産課長の紹介で東京大地を守る会、道場・室井の両氏との出会いにより短角の産直方式による牛肉供給のスタートを切ることができた。

道場・室井両氏は日本短角牛について以前から関心をもたれ、専門的な調査や研究もしておられたので話し合いは順調にすすんだ。

まず基本的な事項を確認合意の上、昭和56年12月8日産直にむけて初出荷、以来現在迄微々たる頭数ではあるが継続出荷されている。

### 4 産直1年間の反省と検討会

順調にスタートした産直もすべてがすんなり進んだわけではなく、ここまで到達する道のりにはいろんな問題点、うねりがあったのも事実である。しかし、1か年がすぎて関係者による反省検討会を盛岡で開催し、更に基本的な事項の再確認がなされ、関係者一体のもとにこの産直の芽を更に大きく育て成長させることを約束したのである。その基本となる事項は、

- ① 安全で健康な牛
- ② 省エネ的畜産
- ③ 山形村の風土、気候の中で無理のない高い生産性を上げること。
- ④ 環境保全、自然に調和した畜産
- ⑤ 生命教育の素材としてふさわしい畜産

であり、以上の条件を満足させ得る牛は日本短角だけであることが確認されたのである。

大地の会からは今まで出荷した枝肉の詳細にわたるデータも発表され、いかにして可食肉歩留の多い肉牛生産を行うのかが、これからの大きな課題であることなどの認識をあらたにすることができた。

## 5 産直が山形村に与えた成果

短角牛の産直がスタートしたが、今までの頭数実績は短角牛の全体頭数から見ると極めてわずかな数である。しかし、現在までの短角牛の歴史の中で真に短角牛を正しく評価し、生産地と消費者がお互いに信頼関係の上に立った産直、これこそ歴史的なことであり・短角牛振興上、高く評価されてよいと思っている。

今まで我々短角牛生産者はややもすると絶望感すらもつことがしばしばあった。しかし、大地の会との産直を通じて生産者に大きな自信と勇気を与えてくれた。これこそ何物にも優る産直の成果といっても過言でないと思う。

更に短角の産直がきっかけとなり山形村と東京の消費者の方々との深い結びつきができたことは、たんに牛肉の取引きというだけでなく人と人とのつながり、心と心の触れ合いが一層高まりつつあること、このことは過疎に悩む山形村全体としても貴重な成果と大きな財産を得たものだろうと考えられる。

消費者の方々との交流を通じて短角牛の改良の在り方、今後の飼育体系の在り方、等々についても我々生産者が方向性をつかむことができたのも産直をやったからこそである。

あらためて、自ら種子を播き、芽を出させていただいた村田県畜試場長、ここまで育てていただいた関係者の方々に深く敬意を表する次第です。

## 6 消費者と生産者との第1回交流会

短角牛の産直1周年を記念して、べこの里山形村で消費者と生産者との第1回交流会が開かれる段取りになった。

山形村に東京から沢山の方々を訪れるのも村の歴史始って以来のことであり、短角牛のみならず村全体の活気を高めることにもつながればと祈っている。

幸いに我々短角牛生産者で組織している生産部会長であり、自らも短角牛の生産に取組んできた小笠原寛氏(35才)が村長に当選した。これを契機に我々生産者は一層ふんどしのひもをしめてかからなければならないと決意を新たにしているところである。

## 7 問題点と今後の課題

今までの内容だと短角牛問題は産直ですべてが解決するという誤解をまねくおそれがあるがそうではない。

産直にも幾多の問題点のあることも事実である。しかし、古くて固いからの中から一步を踏み出したことも確かである。この事実をふまえ今まで“ベコのこっこ”を作って買っていかれることをごく当然のように考えていた我々生産者の意識を、牛肉を作り自ら売るという発想に転換させ、それにむけての積極的な取組みこそが重要である。少しでも高く売りたいことしか考えない経営から、消費者が求め

ている安くておいしい牛肉生産はどうすればできるのか、短角牛のもっている優れた能力を生かしながら、与えられた自然条件の中でいかにしてこれから生き残れる肉牛経営へ展開させるかが今後の大きな課題であると思っている。

短角牛を飼っている地域各地で産直の芽生えがなされ益々発展していくことを念願し、つたない発表を終わります。